

びょういん癸



新規導入の関節鏡について

整形外科 担当部長 庄 沢亮

関節鏡は関節用の内視鏡で、麻酔下に皮膚の小切開部から細い筒状の管を挿入し、その先についたレンズとライトにより関節内を直接観察し、同時に治療も行うものです。

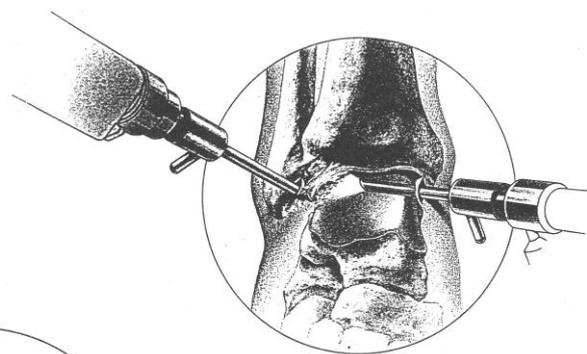
従来の関節の手術では大きな皮膚の切開を必要としたため、患者さんの痛みも強くまた入院期間も長くなりがちでした。それに対して関節鏡による手術では、皮膚の切開も小さく関節に与える様々な影響も少なくすることができるために、入院期間の短縮も可能となっています。

今回当院では通常膝関節や肩関節などの“大きな”関節に使われる径4.0mmの関節鏡に加えて、手関節や足関節のような“小さな”関節にも対応可能な径2.7mmの関節鏡を新たに導入しました。これにより、これら“小さな”関節における異常、例えば骨・軟骨病変や関節ねずみ（関節内遊離体）、靭帯損傷に対する治療や、また時には関節内におよぶ骨折をより正確に整復する事等にもこの細い関節鏡が適用され、より良い治療につなげることができるようになりました。

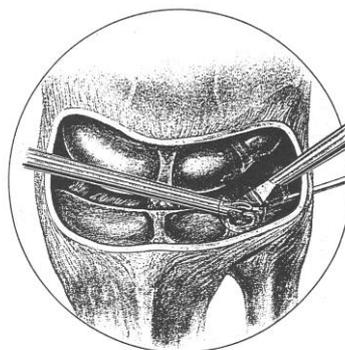
また径4.0mmの関節鏡は、膝関節では半月板損傷や前十字靭帯損傷、関節軟骨の損傷に対する治療に使われ、肩関節では腱板断裂や反復性肩関節脱臼、関節唇損傷などの状態をより正確に診断して、治療を行うことができます。

当院整形外科ではこれら関節鏡を積極的に使用することにより、患者さんへの負担を小さくし、より良い治療結果を得られるようにしています。

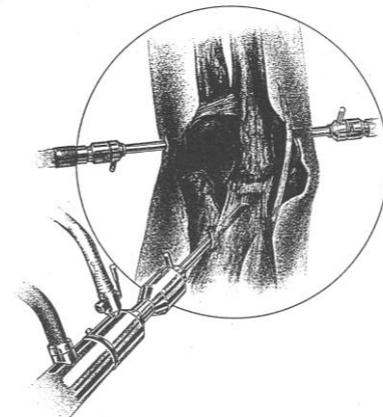
興味やご質問のある方は整形外科スタッフにお尋ねください。



足首の関節鏡手術



手首の関節鏡手術



肘の関節鏡手術



2.7mm の
関節鏡セット

4.0mm の
関節鏡セット



乳腺外科医長 中宮 紀子

近年より身近な病気として知られるようになった乳がんですが、その数は今なお増え続け、日本人女性の11人に1人は乳がんになると言われています。

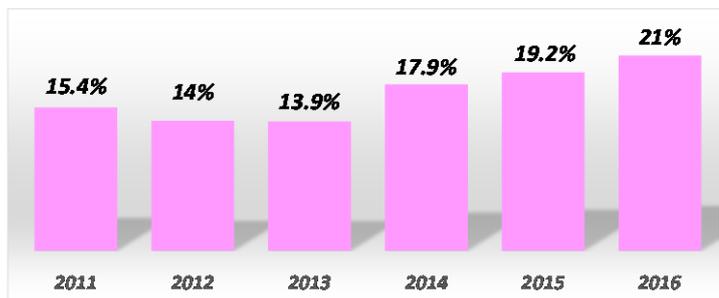
乳がんになりやすい要因として、閉経後の肥満、高齢の初産、授乳期間の短い女性、乳がん卵巣がんの家族歴、閉経後の長期のホルモン補充療法などが分かっており、こうした背景には女性の社会進出による生活様式の変化、食生活の欧米化、長寿などによる影響が考えられます。

また乳がんにより命をおとされる方も年々増え続けています。乳がんの5年生存率は85%であり、他の癌に比べると予後は良好なものですが、胸の中のしこり、脇のリンパ節の転移にとどまらず、骨や肝臓や肺、脳といった場所にまでがんが広がってしまうと治せない病気でもあり、早期発見がとても大切です。しかし乳がん検診受診率をみると、欧米諸国が72~80%であるのに対し、日本は36.4%と非常に低いレベルにとどまっています。欧米諸国は検診普及に力を入れ、その高い受診率を維持することで1990年代より乳がんによる死亡率は減少しましたが、日本では乳がんへの意識が高まるものの、まだまだ自分とは関係のない病気であるという考える傾向があり、検診受診までいかない女性が多く、乳がん領域において、後れをとっていると云わざるを得ません。

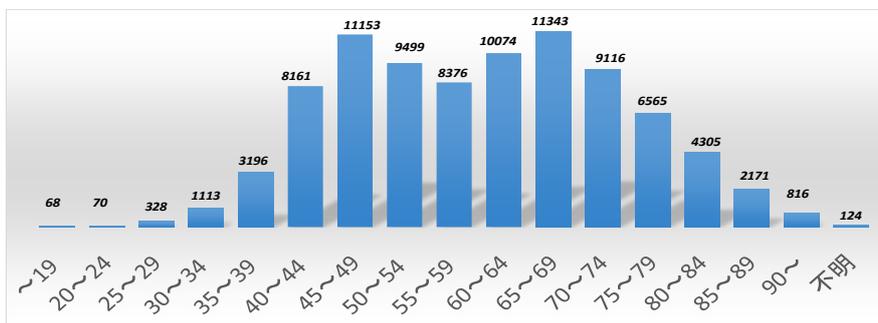
外来に来られる早期乳がんの方の症状としては、圧倒的にしこりに気づいて来られる事が多いですが、乳頭から血の混じった分泌液が出るといった場合もあります。しかし症状もなくお元気な方で、検診異常の結果、ある日突然乳がんとして診断されることも多いのです。さらに乳がんは、胃がん肺がん大腸がんのように、年齢が高まると共に増える癌とは異なり、30代から増加し始め、発症のピークは40歳後半にあります。まさに家庭の中心、職場の中心にある時に乳がんとして診断されることとなります。仕事は続けられるのか、幼い子供や家族へどう伝えたらいいのか、出産や子育てなど、病気に対する不安は当然のことながら、様々な社会的家庭的問題と向き合わざるを得なくなるのが

現状です。治せる病気で、命を落とすことのないように、テレビの報道などで、乳がんという言葉を目にした時だけ検診を受けるのではなく、1~2年に1回、定期的に乳がん検診を受けること、若い頃から関心を持って、乳がんの早期発見を心がけて頂きたいと願います。

大和市の乳がん検診受診率



2013年度 年齢別乳がん患者登録数





産婦人科 医長 竹重 諒子

女性特有の病気は数多くありますが、婦人科疾患の中で月経前症候群（PMS）はあまり病気と認識されていないように感じます。PMSとは、月経前3～10日に続く精神的あるいは身体的症状で、月経発来とともに改善もしくは消失します。症状として、いらいら、のぼせ、下腹部膨満感、下腹痛、腰痛、頭重感、頭痛、乳房痛、怒りっぽくなる、落ち着かない、憂うつ等があります。そして、PMSのなかで精神症状が重症なものを月経前不快気分障害（PMDD）と言います。PMDDは、抑うつ気分や自己卑下の観念、緊張や不安、突然悲しくなったり涙もろくなるといった情緒不安定や、やけに怒りっぽく他人との摩擦がある等の症状が著しいために、社会生活や対人関係、仕事の能率が悪化する状態です。上記のような症状が月経前に生じ、月経後には改善する、ということが2周期以上繰り返される場合にはPMS、PMDDを疑います。

PMS、PMDDの原因ははっきりしていませんが、女性ホルモンと精神状態に関与するセロトニンの異常と考えられています。治療は、まずカウンセリング、運動・食事・睡眠などの生活習慣の改善、サプリメントであり、第二段階として、精神症状に対して抗精神病薬、第三段階として低用量ピルを検討します。

PMDDと認識していなかった女性が、ある日夫から「些細なことでもイライラし、信じられないくらい辛く当たるかと思ったら、急にけろっと普段通りにしていて、君の気分の変動が理解できずにずっと傷ついていた」と打ち明けられ治療を希望したケースもありました。

健やかで自分らしく過ごせる毎日のために、上記の症状に関して気になる方は、お近くの産婦人科にご相談ください。



お知らせ

今年から大和市立病院の「精神科」は
「精神科・精神腫瘍科」
に名前が変わりました。



精神科・精神腫瘍科 医長 小幡 径行

<「精神腫瘍科」について>

「精神腫瘍科」とは一言で言うとがん専門の精神科のことです。がん患者さんやその家族が対象です。患者さんやその家族のストレスやつらい気持ちに対応します。具体的には不安感やうつ、不眠などです。高齢の患者さんの場合は眠れないときにもうろうとして寝ぼけたような状態になることもあります(医学的にはせん妄と言う診断名になります)、そのような症状にも対応しています。安心してがんの治療を続けながら日常生活を送れるようになるのが目標です。

もともと精神腫瘍科は精神科の一部門です。大和市立病院の精神科では以前からがん患者さんやその家族を治療してきました。今年からあえて精神腫瘍科を看板に追加したことには理由があります。

それは患者さんやその家族のストレスやつらい気持ちに対応する精神科の専門窓口がなかったからです。がん患者さんはがんの治療中に様々なストレスを受けて気持ちがつらい状態になり、その半数近くに精神科(次項へ)

～今年から大和市立病院の「精神科」は「精神科・精神腫瘍科」に名前が変わりました。～

の診断がつくと言われていて、適切な専門治療によって改善します。

治療が必要な患者さんやその家族はいるはずなのですが、まだ治療を受けずにいる人は多いようです。もしかしたら「がんになったからつらいのはあたりまえ」とか「我慢しなければ」と思っているかもしれません。

「精神腫瘍科」という専門窓口を作ることが、気軽に相談できるきっかけになれば良いと思っています。よろしく願いいたします。

＜診療について＞

入院と外来の患者さんやその家族に対応しています。お話を詳しくお聞きして必要に応じて最小限のお薬をお出しします。

外来受診の方法は病院ホームページを参照するか、精神科外来にお電話で問い合わせして下さい。当院入院中の場合は主治医や看護師に受診希望をお伝え下さい。



今回は、多職種の職員が、様々な面から患者さんの手助けをする患者サポートセンターを紹介します。

【患者サポートセンター事務員の役目】

患者サポートセンターは、看護師・医療ソーシャルワーカー・事務員の「多職種」でチーム構成されていますが、私たち事務員がどのような業務を行っているか紹介します。

地域連携業務として、地域の病院や診療所と当院が患者さんを治療する上でスムーズに連携が図られるよう、患者さんに直接関わる内容として次のような業務を行っております。

＜地域連携業務内容＞

病診連携（病病連携）	・病院と診療所がそれぞれの役割、機能を分担し患者さんのためにお互いに連携しながら、より効率的・効果的な医療を提供する目的として、電話やFAX、文書でのやりとり
他院診療・検査予約調整	・他の病院等へ、診療や検査の必要な患者さんの予約取得や予約のご案内
紹介予約	・当院は急性期病院として、かかりつけ医など地域の医療機関からの紹介を受けて患者さんの診療を行っており、紹介を受ける際の診療予約（FAX 予約や電話予約）のやりとり
紹介状、返書管理	・患者さんの紹介状をスキャナーで取り込み（診察時に医師が画面上で情報確認できる）や、医療機関の登録 ・医師の診察後、患者さんが来院したことをかかりつけ医等にお知らせするための処理等

また、他の業務として患者サポートセンターでは病床管理業務も行っております。

＜病床管理業務内容＞

病床管理	病床を効率的に運用するための管理・調整をしており、入院される患者さんへ適正なお部屋を提供できるよう調整を行う
------	--

これらの業務以外に、がん診療連携拠点病院に関わる業務なども含め、事務員が多く携わっております。今後とも、患者サポートセンター職員一同よろしく願いいたします。